2010.11.20　創刊号

FD Newsletter

■発行：関西学院大学高等教育推進センター

FDニューズレター発刊に際して

―今歩むこの一歩を―

高等教育推進センター長　久保田　哲夫

しかしわたしたちは、この宝を土の器の中に持っている。その測り知れない力は神のものであって、わたしたちから出たものでないことが、あらわれるためである。わたしたちは、四方から患難を受けても窮しない。途方にくれても行き詰まらない。迫害にあっても見捨てられない。倒されても滅びない。いつもイエスの死をこの身に負うている。それはまた、イエスのいのちが、この身に現れるためである。（コリント人への第二の手紙第４章７～10節）

この４月、総合教育研究室と情報メディア研究センターが統合され、新しく高等教育推進センターが発足して半年がたちました。その間、それまで使われていた授業連絡ボードに代えて新しいシステム LUNA を導入する作業が最終段階に入り、そのシステムを紹介するために、これまで ICT ニューズレターを３回にわたって発行して参りました。秋学期に入り、LUNA の本格稼働も始まり、今回、新たに FD ニューズレターを刊行することができ、感謝しております。

FD、Faculty Development という言葉を素直に読めば教員の能力向上を意味しますが、一般的にはもっと広く、大学全体としての教育力向上に資するものすべてを包含して使われています。もちろん、教員だけで教育ができるわけはなく、その視野には当然のこと、職員の能力開発も入っています。

しかし、この FD という活動が、大学のすべての人々に受け入れられているかといえば、必ずしもそうではありません。むしろ、私の目から見れば皮肉なことに、実際の教育活動においては FD に非常に熱心に取り組んでいる教員にむしろ反対者が多いようにも見受けられます。

その理由は、一にかかって、大学教員が、今過重な負担を強いられて、疲れ切っているという点にあります。自らは FD に熱心でありながら、FD 活動に反対される先生方は、自分のためではなく、このままではつぶれてしまいかねない後進のために、あえて嫌われ役を引き受けているのでしょう。

世界に通用する研究をし、教育には熱心で、事務的な仕事もきっちりこなす人材でなければというのは、無い物ねだりです。大切なことは、天才だけが出来ることを求めるのではなく、ごく普通の教員が当たり前にできるような範囲で改革を進めることでしょう。それでなければ若い人達をつぶしてしまいます。

「すべての嬰児は神がまだ人間に絶望してはいないというメッセージをたずさえて生れて来る」というタゴールの言葉がありますが、後進が育たない社会に未来はありません。しかし、今、大学は後進を育てる余裕すら無くしている状態です。

若い人達がわたしたちの後に続いて、これまでの大学が大切に守ってきたものを引き継いでくれることが確信できるような大学にしたい。高等教育推進センターは、教職員がそのための活動をする場でなければならないと思っております。しかし、ご承知のように、今、大学は危機の中にあります。どうしていいか途方にくれるようなことも今後多々あると思います。

しかし、聖書にあるように、大切なものが何かを知っているものは、「途方にくれても行き詰まらない」のです。今、どちらに向けて歩けばいいかさえ分かっていれば、そちらに歩き始められるのです。“Keep Thou my feet; I do not ask to see/The distant scene; one step enough for me” と讃美歌「たえなるみちしるべの」の歌詞にあるように。

高等教育推進センターは、その皆さんの歩みを少しでも支えることが出来たらと願っています。

教育力向上(FD)専門部会について

高等教育推進センター（以下当センター）に課せられた業務の１つに、全学的な視点から教育力向上(FD) に関する施策などについて提案を行うことがあります（高等教育推進センター規程第３条２)。そのために当センター運営委員会のもとに教育力向上(FD) 専門部会が常設されています（同規程第 13 条)。現在のメンバー構成は表１に示されています。

現在この部会に託されたタスクとして、来年度に実施が予定されている授業評価で用いる調査項目の検討があります。本学の授業調査はこれまで全学共通の設問が 10 項目用意され、集計と分析の対象になってきました。これらの項目についてさらなる検討が教務委員会より要請されています。ここでの作業結果は教務委員会に当センターからの提案として示される予定です。調査項目の文案は教務委員会での審議と決定を経て、授業調査に反映されます。

全学共通の質問項目についての改善の検討、学部のご要望といかに摺り合わせていくかなどについては当部会において議論してまいりますので、ご意見がおありでしたら当センターもしくは表中の各メンバーにお伝えいただければ幸いです。

表１　高等教育推進センター FD 専門部会委員一覧

委　員	氏　名
センター長	久保田　哲　夫（総合政策学部教授）
センター副長	山　田　真　裕（法学部教授）
センター副長	地　道　正　行（商学部教授）
教務副部長	浮　田　　潤（文学部教授）
神学部委員	土　井　健　司（神学部教授）
文学部委員	後　藤　裕加子（文学部准教授）
社会学部委員	金　　明　秀（社会学部教授）
法学部委員	原　田　　剛（法学部教授）
経済学部委員	岡　田　敏　裕（経済学部准教授）
商学部委員	阪　　智　香（商学部教授）
理工学部委員	山　本　倫　也（理工学部准教授）
総合政策学部委員	山　田　孝　子（総合政策学部教授）
人間福祉学部委員	川　村　暁　雄（人間福祉学部准教授）
教育学部委員	宮　本　健市郎（教育学部教授）
国際学部委員	長　谷　尚　弥（国際学部教授）
学長直属委員	大喜多　喜　夫（教職教育研究センター）
センター長指名委員	谷　田　　薫（高等教育推進センター）
事務局	澤　谷　敏　行
事務局	永　井　良　二
事務局	在　田　憲　史

就 任 挨 拶

高等教育推進センター副長（教育力向上(FD)担当）
山田 真裕

本年 10 月 1 日付で高等教育推進センター副長を拝命いたしました。担当する職掌は教育力向上（FD）です。浅学菲才の身には余る大任ではありますが、教育力向上（FD）専門部会の皆様のご指導を仰ぎ、さらにまた久保田哲夫高等教育推進センター長はじめ本センタースタッフのご支援を賜りながら、なんとか任を果たしたいと考えております。

率直に言って FD（Faculty Development）という言葉の響きはあまり好きではありません。最近は FD から ED（Educational Development）へと進化したそうですが、これについてはさらに好きになれそうもありません。外部に対する申し訳としてやらざるを得ないが、できることならばやらずに済ませたいものという意識が私自身の中にも色濃くあるからでしょうか。

ただ同時に、学生に対する時に常々思うのは、自分は教員としてもう少しなんとかならないだろうか、もう少しうまく学生に学問の面白さを伝えられないだろうか、もう少しうまく学生を自分で考える喜びへと導けないだろうかということです。私の専門は政治学です。私の目の前にいる学生の多くは法学部政治学科の学生ということになります。彼らの多くは在学中に有権者となり、日本人であれば日本の民主制を支える一翼を担う存在になるわけです。なので彼らが賢明な有権者として社会に存在することを願って教壇に立っていますし、そのことに資するような教育をしたいと常に願っています。

FD などという言葉があろうとなかろうと、自分が学生に伝えたいことや教えたいことがあるのであれば、どうすればそれが少しでもうまく伝わるかを考え工夫することは、教員であれば誰もが普段からしていることだろうと思います。FD 担当副長などという仰々しいポストは全く自分の柄ではありませんが、これを期に様々な先生方のご努力やご工夫、ご苦心に触れさせていただきたいですし、愚痴の 1 つも言い合うことでせめてガス抜きができたらと考えております。

昨年読んだ興味深い本の 1 つに Scott E. Page の *The Difference: How the Power of Diversity Creates Better Groups, Firms, Schools, and Societies*（Princeton University Press, 2007. 邦訳書は水谷淳訳『「多様な意見」はなぜ正しいのか－衆愚が集合知に変わるとき』日経 BP 社、2009 年）があります。この本の面白さは、多様な発想の重要性をコンピュータ・シミュレーションの結果によって示している点です。教育力向上（FD）というものを切り口（というか口実）にして、集合知を生み出すことが出来ればこのセンターを作った意義が十分に認められることでしょう。このセンターを介して教員間の教育に関するコミュニケーションがより豊かになることのお手伝いをさせていただければというのが、就任にあたっての抱負です。

高等教育推進センター活動報告

1）新任教員研修会

教務部と協力して、去年度まで 3 日間で実施されていた新任教職員の研修会を、拡大して 5 日とし、2 日間の FD 関連の講演会、講習会、ワークショップ等を盛り込んだ研修を実施しました。日程内容は以下の通りです。

第 4 回新任教員研修会　5 月 15 日（土）

＜公開研修＞

1．講演会　大学教育とその問題点（10:00 ～ 12:00）
「高等教育の意義と解決すべき問題点」
講師：絹川正吉　元国際基督教大学学長

2．授業をよくするための工夫（13:00 ～ 16:00）
①「授業評価・学生生活調査からみた今どきの大学生」
講師：谷田薫　高等教育推進センター教育技術主事
②「授業デザインと成績評価」
講師：矢倉達夫　教務部長
③「教授者－学習者支援システムについて」
講師：嶋﨑恒雄　高等教育推進センター副長

第 5 回新任教員研修会　6 月 19 日（土）

＜公開研修＞

講義法スキルアップ講座
①「障がいのある学生に対する修学支援の方法」
講師：高畑由起夫　総合政策学部教授
②「多人数講義における双方向的授業の工夫」
講師：森田雅也　文学部教授
③「グループ学習を成功させるコツ」
講師：佐藤浩章　愛媛大学教育学生支援機構教育企画室副室長 (准教授)

2）FD ワークショップの開催

倉茂好匡氏（滋賀県立大学環境科学部教授・大学教育実践支援室長）を講師に迎え、大学院生・研究生を対象とした FD ワークショップ 「講義方法基礎の基礎」を以下の内容日程で開催しました。他大学の大学院生 1 名を含む 15 名の参加を得、内 14 名が全ての日程を修了して本センター長からの「修了書」を授与されました。

FDワークショップ「講義方法基礎の基礎」日程及び内容

	9月1日(水)		9月2日(木)		9月3日(金)
10:00～12:00	**講義「授業の基本①－基本の基本」** ・授業中の発声方法 ・教師の立ち位置 ・板書の使用法 ・授業展開上の工夫	10:00～12:00	**講義「授業の基本②－学生の興味をひきつけよう」** ・授業展開上の工夫 ・授業展開で注意するべき事	10:00～12:00	**講義「授業の基本③－発問と宿題」** ・学生が授業中にも頭を働かせ続けやすくするための「発問」 ・発問のいくつかのタイプ ・どのような宿題を出すべきなのか、それに対する事後指導
	昼休み				
13:00～16:30	**ワークショップ「授業の基本技術を身につけよう」** ・参加者がミニ授業を行い、具体的アドバイスをうけ、授業スキルを向上させる	13:00～15:00	**ワークショップ「教材研究」** ・その日に行う授業範囲の教材から「ヤマにすべきところ」を抽出し、そこをどのように扱ったら「学生が理解してくれるか」を検討していく ・「授業で実際に取り扱うべき部分」と「学生の自習に任せる部分」との仕分け ・グループワークで教材研究を行う	13:00～15:30	**ワークショップ「授業を完成させよう」** ・前日の教材研究を踏まえて練ってきた個々の授業詳細案に、午前中の講義内容を参考にして「発問」を交え、5～10分の授業を各自行う ・これまでに身につけた、「授業に対して観察すべきポイント」を押さえ、一人一人の授業について振り返る
				15:30～16:30	**講義「授業の基本④－視聴覚教材の効果的利用法」** ・どのような教材を選ぶべきか ・学生にどのような作業をさせるべきか

出張報告 1

平成 22 年度滋賀県立大学 FD 研修会
「授業の基本」全 6 回　参加報告

主　催：滋賀県立大学教育実践支援室
協　賛：彦根 3 大学・大学間連携協議会教育連携部会
講　師：倉茂好匡
（滋賀県立大学環境科学部教授・大学教育実践支援室長）
出張者：高等教育推進センター
谷田　薫（教育技術主事）

滋賀県立大学・大学教育実践支援室主催の FD 研修会（6 回）に参加する機会を得たので、以下に報告します。この研修会は、彦根 3 大学（滋賀大学・滋賀県立大学・聖泉大学）連携の元 3 大学に開かれたものとして毎年開催されているものです。今回、関西 FD 連絡協議会の加盟校にも開かれたため参加させて頂いたものです。

第 1 回，第 2 回
2010 年 4 月 2 日 (金)10:00 ～ 12:00，13:30 ～ 15:30

第 1 回（もっとも基本的なこと）では、「授業の中身」ではなくすべての教科に共通した「やり方」を問題とするために教材は「味噌汁の作り方」であった。研修会は、配布された「授業計画」に沿って勧められた。この「授業計画」は、「準備（5 分）」「導入（5 分）」「授業の基本展開（20 分）」「板書の基本（10 分）」「話し方、視線の置き方（10 分）」「学生への効果的な発問（5 分）」「まとめ（5 分）」―計 60 分で構成されていた。この授業計画のように効果的な時間配分を考える必要性が示された。まずは導入で「これから何を学ぶのか？」聞く気にさせる動機付けを与えること。展開部では、授業の内容について項目別に細かい枝葉を省いて一項目 20 分程度を目安に内容を組み立て、最後に全体をまとめる。という構成の重要性が理解できた。特に「『何を話すか』ではなく『どう話すか』の計画を立てる。」というのが印象的でした。これらの内容を「味噌汁の作り方」を題材にしてきっちり 1 時間で修了したのもすごいと思いました。その他の部分も含めて 2 時間があっという間でした。（おみごと !!）

第 2 回（授業展開で陥りやすい罠―学生を引きつけるには―）
ここでいう「陥りやすい罠」とは、「総論大好き症候群、具体性欠乏症」だと倉茂先生はおっしゃいます。これに陥らないために、導入部で学生の興味を引きつけるパターンがいくつか紹介されました。「目標明示型」「ハッと・ドキッと型」「例示型」「抒情型」などで、「ハッと・ドキッと型」を実演された時は，結構冷や汗ものでした。展開部では、学生が「わかった！」「なるほど！」と思う内容を加える。興味の持てる事例を交える。20 分に 1 回は授業に変化を付ける。理解度を確かめるための「具体的な発問」を交える。などなど、が示された。特に「具体的な発問」については、自分がよくやっていた「何か質問はありませんか？」「わからないところはありませんか？」という発問がいかに無意味だったか自覚させられました。
以上 1 日飽きずに 4 時間すごせました。倉茂先生の流れるような講義展開にふんふんと理解したような気になっていましたが、いざこの報告書を書こうとしたらすらすら出てきません。やはり事後の復習が、知識の定着のためには必要なのだということを再認識しました。

第 3 回：2010 年 5 月 7 日 (金)18:30 ～ 20:20

「学生の理解度確認」
第 3 回研修会では、学生の理解度を測るための基本的なテクニックについて、流体力学、「非圧縮性流体の連続方程式」が教材として使用された。初学者（参加者の 8 割が流体力学について未経験であった）に新しいテクニカルタームや数式的記述をいかに理解させるか、そのための学生の反応を確かめる要点を交えて研修会がすすめられた。授業構成は、まず配られた教材から、各人に流体力学の初学者にはどこがどうわからないか、すでに知っている者はこれをどう教えるかという要点を書き出す作業で 10 分間ほどの導入がはかられた。続く導入の展開として、水の「連続」の意味を一般的な例を用いて説明していき、「流速」「流量」といったテクニカルタームの意味を説明。次いで数式理解に必要な偏微分について基本的な確認が行われた。その間、「確認のための発問」が繰り返された。

目的の「連続方程式」の展開部分では、丁寧に数式を展開し繰り返しの部分を各自の作業とし、その間机間巡視を行い各人ができているかを観察する。など、学生理解を計るためのポイントとタイミングが示された。

以上の実践以外でも、

・学生の表情を観察する。
・具体的な発問を十分に用意する。
・「しっかりノートを取らないといけない」仕掛けを考える。

特に、「教材研究」の重要性が強調された。

第4回：2010年6月4日(金)18:30～20:20

「視聴覚教材の使い方」

今回も講師の視聴覚教材についての経験などを導入に12-3 分、その後グループに分かれて「どのような教材をどう使うか」についてグループディスカッションで15分、その後の発表で20分、事例のビデオで15分、その解説で10分程度、パワーポイントの例と解説10分、まとめ、という展開であった。

グループディスカッションの結果、どう使うのが効果的かということで

・言葉での説明が難しいとき(百聞は一見にしかず)
・学生が「みたい」と思っているとき
・本物を見せたいけど見せられないとき
・ないとわからないもの、授業展開に変化を付けたいときなどに有効

などという意見が出された。

留意点は、「あまりだらだら見せない」「スライドと板書を併用するなどメリハリを付ける」パワーポイントの作り方では、「1スライド10行程度を守る」で見やすさに留意し、使い方では、「PPに載せていることをだらだら読まない」「授業内容の変化に気を配る」「板書でできることは板書でする」「板書できない図や地図、表などをPPで」「細かい図表資料は配付する」などを基本とする。

以上のまとめとしては、あくまでも内容が「総論大好き」「具体性欠乏」になっていないか確認することが重要だということでした。

第5回目：2010年7月9日（金）18:30～20:20

「指導と発問」

指導：遅刻、私語、授業中他の事をするなどの学生の問題行動にどう対処するか。一番悩ましい問題について、おしゃべりをするのは...

・授業が退屈、何を言っているのかわからない
　→授業の方法や内容を改めるべき
・その授業に興味がない→何らかの指導を

遅刻、途中退室については

・一言事情を質すべき
・「寝坊」などが原因なら一言謝らせる

◎コースの最初にクラスに約束事をつくる

私語や問題行動についての約束事、遅刻・途中退席などへの対処等

※ただし、約束した以上は教師も約束を守るべき

発問：何を目的とした発問なのかを意識する

・全員にそれとなく考えさせたいのか？
・全員に事例を考えさせたいのか？
・誤解が多いのでそれを取り除きたいのか？
・グループディスカッションにつなげたいのか？
　など

ポイントは、授業のそれぞれの部分の

①授業の山は何か？
②どう伝えるのか？
③そのためにどう発問をするのか？

＊授業の目的:伝えたいことを、伝える・考えさせる・意識させるための発問を授業の計画に基づいて前もって用意してくることが大事。

第6回目：2010年7月30日（金）18:30～20:20

「宿題と評価」

学生にどのように自学自習を促すのか、現在大学教員が一番窮するところであろう。

学生に自習させる

・「自習を強いる」仕掛けが必要
・自習には「予習」「復習」「定着学習」「深化学習」「作業」がある。

・「予習の要求→してこないと授業が受けられない、わからない」
・「自習しないと成績が下がる→宿題を成績に含める」の仕掛けが必要
・復習させる工夫→ノートの提出、小レポート、小テストなどが効果的
・宿題：何を目的に宿題を課すのか？
・復習、授業内容の定着・応用、より深く学ぶ、授業中にできない作業をする等

宿題を課すときの必須事項

・同じ資料を全員が利用できるようにする。
・学習すべき内容が「具体的」であること
・教師は必ず目を通し朱を入れる。提出の記録を付ける。
・学生へ結果をフィードバックする。
・１～２時間でできる作業量

さらに物理と環境科学の別の教員から、宿題を課すことで学生の理解が深まり、テストの点数が良くなることが、主題を添削する事に対してモティベーションをあげている。という授業担当者からの事例報告があった。

＜個人的感想＞

＊学生が「予習」してくるのを前提に授業を組み立てた場合、大半の学生が予習をしてこなかった時に授業が成り立たないのでは？
＊宿題の場合は、100 人を超える大人数クラスでは、添削を行えるような専門性を持った TA・教育補助者が必要だろう。

出張報告２

東北大学高等教育開発推進センター国際シンポジウム「大学教育開発とネットワーク・大学院教育の役割」参加報告

日　時：2010 年 8 月 24 日（火）9:30 ～ 17:00
会　場：仙台国際センター
出張者：高等教育推進センター
谷田　薫（教育技術主事）

大学教育の改善は、1990 代から日本ではＦＤというワードで語られ、おもに、「授業方法の改善」と同義語で理解されてきた。しかし、大学教員の専門性の開発とはより幅広く捉えられる必要性が指摘され（中央教育審議会答申、2008）、大学教員として必要とされる職能や教育力の内容を明らかにする事も重要となっている。このように考えると、これまで日本のＦＤ活動の中ではあまり考慮されてこなかったカリキュラム改革、施設・設備の整備、教授法などの革新など組織的な教育開発（Educational Development）と教員の教育能力・教育技術開発との関係を明確にすることが必要となってくる。この大学教員の能力開発は、それぞれの教員のライフ（キャリア）ステージと組織のニーズに調和したプログラムを開発する事で実現可能であると考えられる。そのステージとは

①大学院における養成訓練
②入職後の初期キャリア
③中堅教員キャリア
④退職を視野に入れた最終段階の教員キャリア

である。（羽田）

これらを踏まえて、カナダ、アメリカにおいては①の段階における PFFP(Preparing Future Faculty Program) としての大学院教育と、英国、豪州においては②における Postgraduate Certificates in Learning and Teaching(PCLT) プログラムについての報告が５カ国の発表者からあった。

米　国：Dieter J. Schonwetter, Core Committee Professional and Organizational Development Network in Higher Education (POD),USA
英　国：Liz Shrives, Co-Chair Staff and Educational Development Association (SEDA) UK
豪　州：Geoffrey Crisp, President The Higher Education Research and Development Society of Australia
カナダ：Joy Mighty, President Society for Teaching and Learning in Higher Education（STLHE）CAN,
日　本：松下佳代、京都大学高等教育研究開発推進センター教授、FD ネットワーク代表会議

（メモ）
英国 PCLT：60 単位の大学院レベルのコースプログラム、130 の機関で採用されている。新任教員必須。

出張報告 3

国際セミナー＆ワークショップ
新任教員研修プログラムの戦略的構築
～ 英国 PGCHRE の実際に学ぶ ～

主　催：国立教育政策研究所
日　時：2010 年 9 月 29 日(水) 11:00-17:10
出張者：谷田　薫（教育技術主事）

講演会：11:00-12:50
講　師：Derek Cox (University of Leicester Head of Academic Practice)

イギリスでは、大学の新任教員（教育経験 3 年以内、仮採用中の教育スタッフ）は教授資格証明取得の教育課程（Postgraduate Certificate in Higher Education, PGCHE,PG Certificate）を修了する事が実質義務化されている。この教育課程は The Higher Education Academy による枠組み（The UK Professional Standards Framework for teaching and supporting learning in higher education）に基づいている。この基本は 60Credit（半年のフルタイムスタディに相当）からなる。しかし、とりあえず 30 単位のコースを修了する事でアカデミーの準会員として認められ、正規採用の条件を満たす。もうひとつのアカデミーの会員になる（教授資格証明取得を得る）ための方法は、個人で自分の教育職能開発を行った経験および成果を、エビデンスを持ってアカデミーに申請し認められる事である。

レスター大学では、40 単位のコースを設けている。これは 2 週間おきに 16 回開催される対面授業と、コンテンツを示してそれについてオンラインのディスカッションをブラックボード上で行う事から構成されている。基本的にはコースは pass か fail であり、pass するまで課題を再提出し続ける。

ワークショップ　14:00－17:10
①Cox 講演の振り返りと日本への適用可能性
（ファシリテーター　加藤　新潟大学）
②新任研修の在り方をどう考えるか　（杉原　山形大学）
③「基準枠組」の考え方と利用法（岡田　長崎大学）

お知らせ

高等教育推進センター FD 講演会

90年代の高等教育政策は成功したか？
～今求められる高等教育のグランドデザイン～

講　師：羽田貴史（はた たかし）
（東北大学高等教育開発推進センター教授）
日　時：2010 年 12 月 2 日(木) 13:00 ～ 15:00
場　所：関西学院会館　2F 「光の間」

＜講演要旨＞

21 世紀も最初の 10 年を過ぎようとしているが、高等教育の行く先は政権交代もあってますます不透明になっている。少子化・ユニバーサル化のもとでの教育の質保証、国際的な競争のもとでの卓越性の確保、産学連携など社会経済の発展と大学の役割など、高等教育は複雑化した課題を担っている。この課題を、計画行政ではなく、法人化や規制緩和など市場メカニズムの拡大で解決しようとしたのが、90 年代からの高等教育政策であった。果たしてこの政策はどこまで成功してきただろうか。現在、中央教育審議会では、中・長期の高等教育のあり方について議論しており、その内容にも触れながら我が国の高等教育のデザインを考えてみたい。

編集後記

この秋になってにわかに身辺が騒がしくなった。はからずも高等教育推進センターの副長（FD 担当）となり、最初に念頭にあったのはこのニューズレターの発行だった。すでに ICT ニューズレターが発行されていたこともあり、まず創刊を急がなくてはとの思いから今号はセンター関係者の執筆が中心となった。次号以降はぜひとも各学部、研究科などの教育現場を反映した編集にしたいと考えている。関係各位のご協力をこの場をお借りしてあらためてお願いしたい。

山 田 真 裕

FD Newsletter
2010 年 11 月 19 日
発行：関西学院大学高等教育推進センター
〒662-8501　西宮市上ケ原一番町 1-155
TEL：0798-54-7420
FAX：0798-54-7421
HP: http://www.kwansei.ac.jp/cerphe/index.html

◎FD Newsletter 編集委員会では、FD に関する情報、ご意見、ご感想をお待ちしております。寄稿も歓迎致します。詳しくは、高等教育推進センター（FD-NL@kwansei.ac.jp）まで。